

いちおうじ

# 一王寺(1)遺跡 現地説明会資料

平成26年10月18日(土) 10:00～、13:00～(2回)

八戸市埋蔵文化財センター 是川縄文館

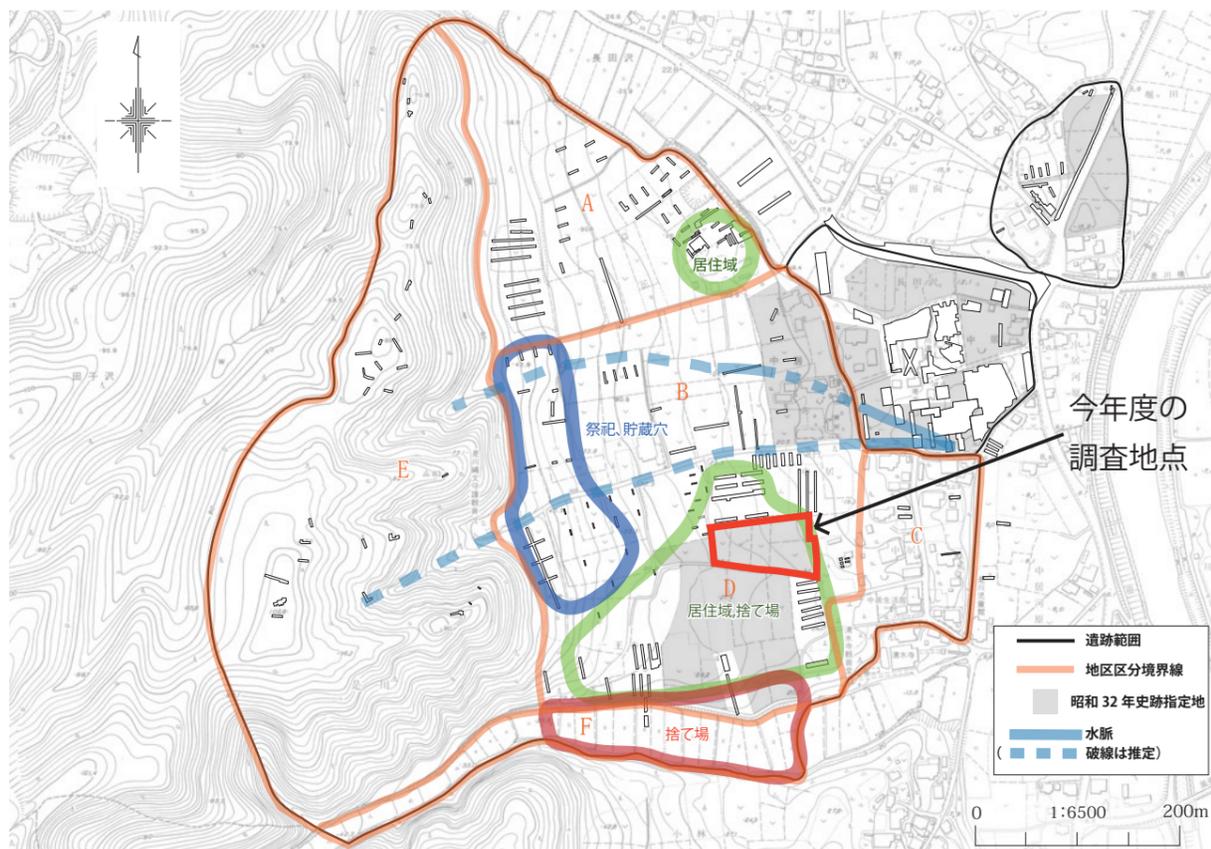
## 【遺跡の概要】

本遺跡は八戸市の中心部から南へ約4kmに位置し、新井田川の左岸に立地しています。標高70～100mの丘陵と、標高18～44mの新井田川へ向かう緩斜地にかけて広がっています。遺跡の南端は寺ノ沢と呼ばれる東西方向の沢地、北から北東端には、北西から南東に走る長田沢があります。遺跡の総面積は32万6千㎡です。

縄文時代前期から中期(今から約6,000～4,000年前)の円筒土器文化期を中心とした大規模な集落であり、昭和32年(1957)に中居遺跡・堀田遺跡とともに「是川石器時代遺跡」として国の史跡に指定されています。八戸市では、平成7年(1995)から22年(2010)まで範囲・内容確認のための発掘調査を行ってきました。その結果、一王寺(1)遺跡と堀田遺跡においてその内容が確定し、平成25年に両遺跡の重要な範囲の追加指定が決定しました。

## 【調査の目的】

今年度の調査地点は、昭和4年(1929)に大山史前学研究所による発掘調査で、縄文土器・石器のほか獣骨や貝・鹿の角や獣骨で作られた釣針などの骨角器が多数出土した場所に当たります。当時は「一王寺貝塚」、または字名から「中居貝塚」とも呼ばれていました。今年度の調査は、当時確認された貝塚の位置を特定し、85年前の発掘調査記録を検証するものです。また、一部調査されていない場所の発掘調査もおこない、遺跡の内容確認を行っています。



一王寺(1)遺跡場の全体図

## 【調査要項】

遺跡所在地:八戸市大字是川字中居28-1・2

調査目的:史跡整備のための内容確認調査

調査期間:平成26年8月1日～10月31日(予定)

調査面積:約600㎡

調査担当者:八戸市埋蔵文化財センター是川縄文館

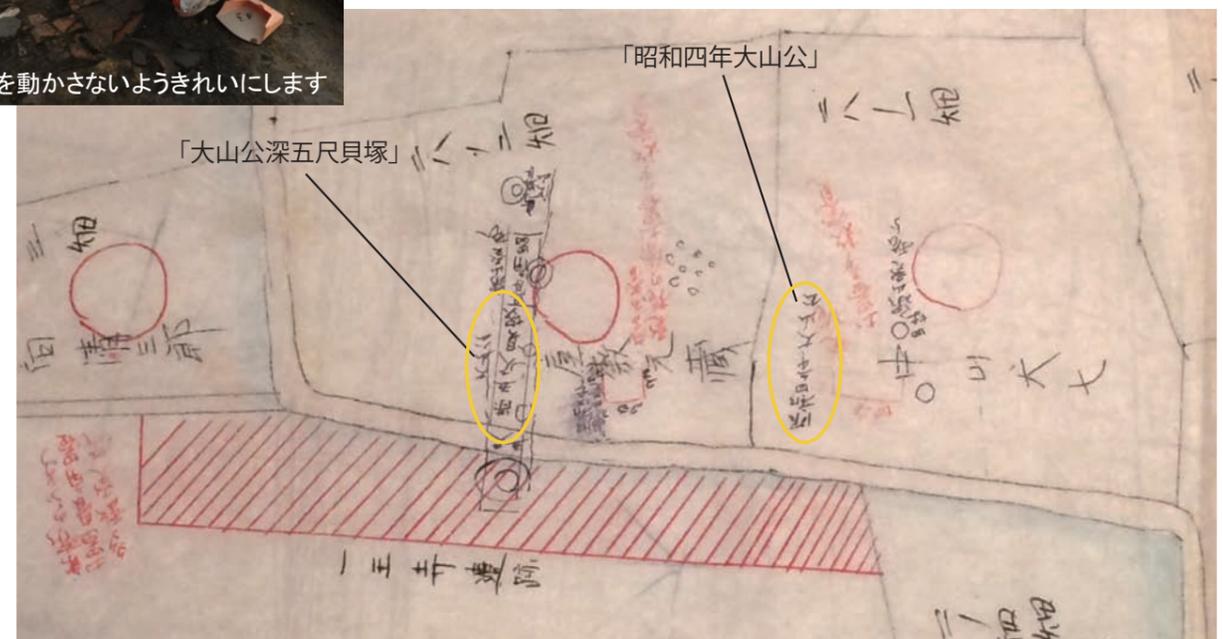
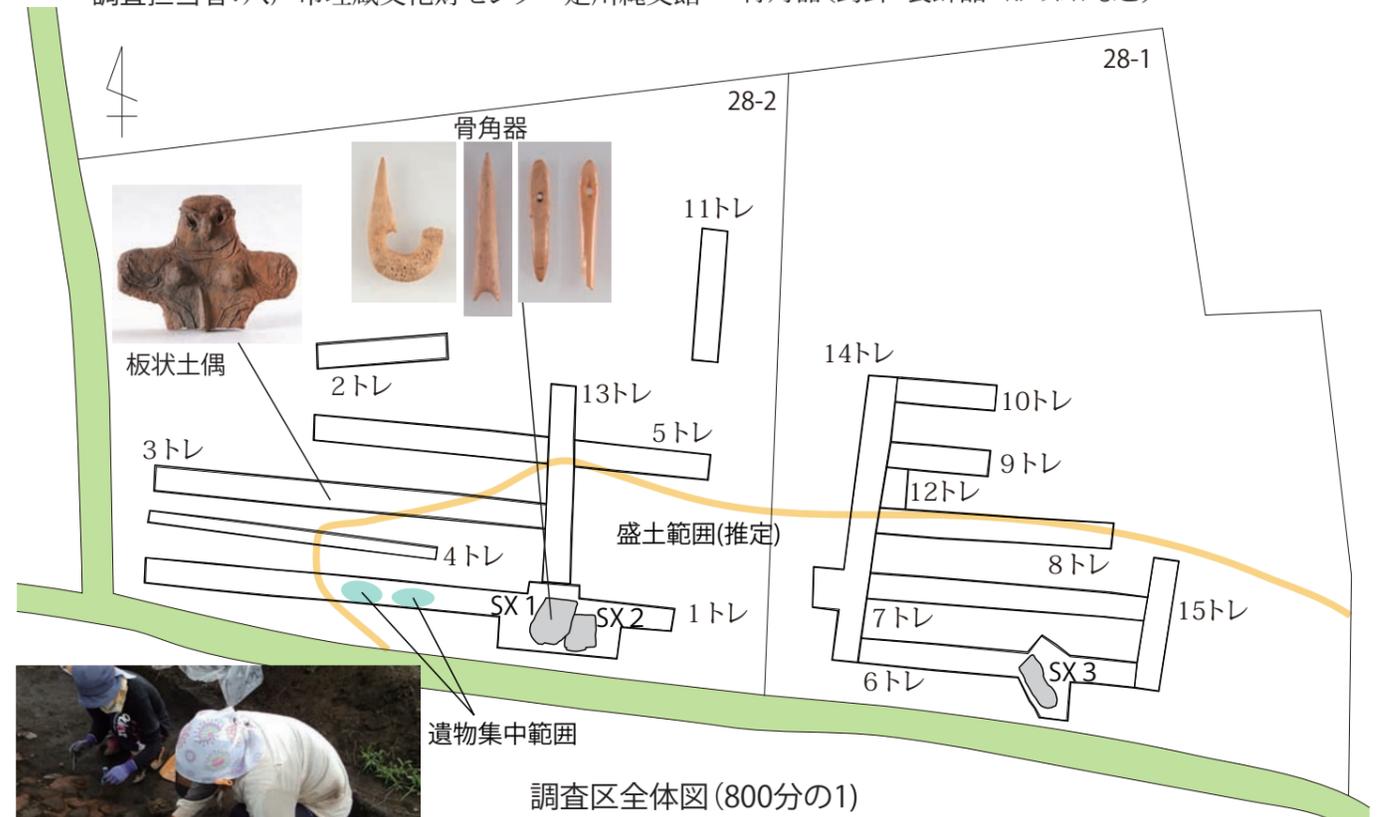
検出遺構:貝塚、盛土遺構

出土遺物:縄文土器、石器(石鏃・尖頭器・石匙・すりいし)

磨石・磨製石斧など、土製品(土偶・えんぱんじょうどせいひん)

円盤状土製品、動物遺存体(貝・骨・炭化種実)

骨角器(釣針・装飾品・離頭銚など)



泉山斐次郎による発掘調査記録(原本:縄文学習館に展示)

【過去の発掘調査穴を発見】

1 トレンチ東側で、現代に掘られたとみられる2つの穴を検出しました。西側をSX1、東側をSX2と名づけました(SXは性格不明、つまりよくわからないものに付ける仮の記号)。

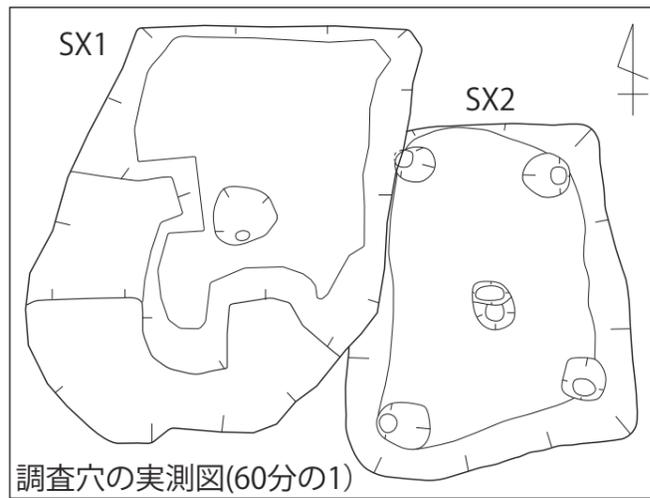
SX2が古く、SX1が新しいことがわかっています。

SX1 東西2.8m×南北3.3m＝約9㎡

深さ1.9m(ピット底面まで2.6m)

SX2 東西2.5m×南北2.7m＝約6.5㎡

深さ1.8m(ピット底面まで2.4m)



(1) 掘り方の特徴

SX1の平面形は、南に向かって膨らむやや不整形な形です。また南側に2段の階段が付き、土を運び出し易くなっています。西壁には大きな横掘りの跡があります。中央に大きさ4.5×5.0cm、深さ70cmのピットが1基あり、地山までの堆積状況を確認するために掘られたとみられます。

SX2の平面形は比較的整った長方形で、東南北の土層が確認できます(西壁はSX1に切られているため一部のみ)。四隅から大きさ4×4cm・深さ60cmのピットが4基、中央に大きさ3.5×4.0cm、深さ20cmの浅い掘り込みが検出されています。



六角形の鉛筆 (SX1より出土)

(2) 出土遺物の特徴

SX1からは、多量の縄文土器(円筒下層a・b・c式土器主体)・石器のほか、シカ・ノウサギ・ムササビ・イルカなどの動物骨、サケ・ウグイなどの魚骨、コタマガイ・カキ(マガキ)・イガイ・アサリ・シジミ(ヤマトシジミ)などの貝がたくさん出土しました。また、動物の骨で作られた釣針・針・離頭銚などの骨角器も出土しています。土の中には小さな魚の骨や貝、骨角器が含まれているため、土を土のう袋に入れて回収し目の細かい篩(ふるい)にかける作業を行っています。篩(ふるい)作業の過程で、SX1を掘った人のものみられる「鉛筆」が見つかっています。

SX2からもSX1と同じく縄文土器・石器、骨・貝片が出土しましたが、量が少なく、残りの良いものはほとんど出土しませんでした。SX2では現代遺物として「ボタン」「黄色クレヨン(?)」が見つかっています。



SX1の縄文土器、イルカの椎骨(赤丸)出土写真



SX1の縄文土器、獣骨、マガキ出土写真

【縄文時代の貝塚と盛土遺構】

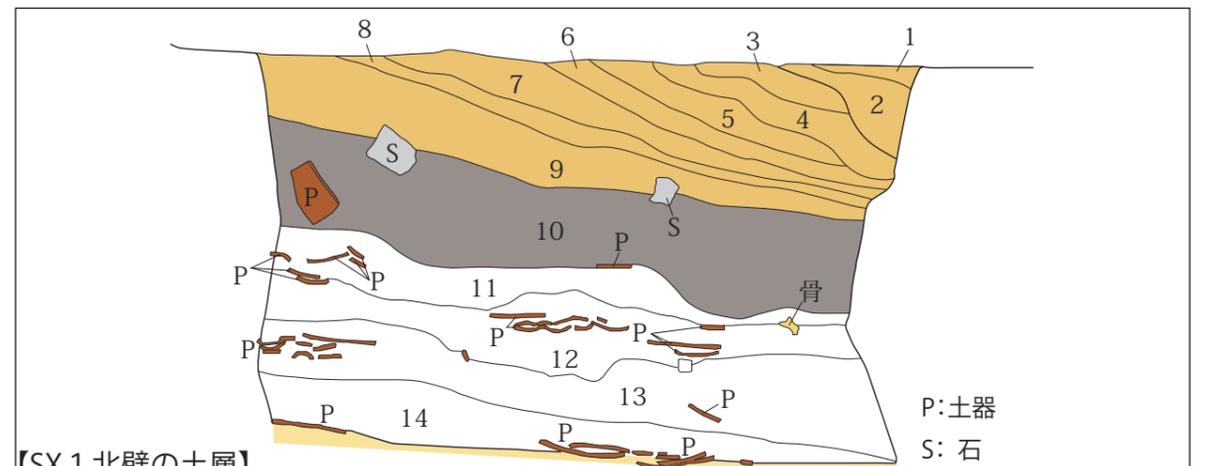
今回の調査成果のひとつは、「一王寺貝塚」の位置を特定できたことです。SX1北壁の11～14層が縄文時代前期の貝層です(約40cm)。SX2の壁にも貝層がみられ、南側に向かって貝層がより厚く堆積していることが確認されました(SX2南壁で約90cm)。

もうひとつの調査成果は、縄文時代前期から中期の盛土遺構を確認できたことです。SX1北壁の1～9層がこれにあたり、粘土に焼けた土・炭・骨片と多量の縄文土器・石器が混在した状態で堆積しています。本地点の旧地形は、北に向かって下る斜面となっており、斜面に粘土や遺物の廃棄が繰り返し行われていたものとみられます。



縄文時代の貝塚を確認(SX1北壁)

SX1北壁の断面は、弘前大学人文学部北日本考古学研究中心の協力のもと、断面の剥ぎ取りを行い、展示などに活用する予定です。



【SX1北壁の土層】

1～9層：縄文時代前期から中期の盛土  
10層：縄文時代前期の土層(貝片を若干含む)  
11～14層：縄文前期の貝層(炭・焼土・骨片を含む)  
14層以下：中振浮石層

SX1北壁の実測図(150分の1)